場所　〒502-0812 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

わいわい、がやがや、みんなで哲学

哲学カフェ de ぎふ

千秋(せんしゅう)まちかど文庫 通信

第176号
2023年3月

運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第176回哲学カフェ例会(2023,2.9)

≪いかに食糧自給率を上げて行くのか…このままでいいのか？ ≫

「予想以上に白熱した意見交換がなされました。ウクライナ戦争に発した食糧危機を深刻に受け止めたいることがひしひし伝わってきた例会でした。」

＜問題提起＞　主宰者:吉田千秋

・今日は、岐阜大学名誉教授の安部淳さんにアドバイザーとして加わって頂いて、日本の食糧問題、特に食糧自給率問題について考えたいと思います。日本の食糧事情に警鐘を鳴らす声はしばしば聞かれますが、実際に危機感を持っている人は多くないのではないでしょうか。スーパーには品物が溢れていて不足を感じることはありませんから。もちろん十分食事を取ることができずにフードバンクに頼っている人たちがいる日本の現実のことは承知しています。物価高で消費代を切り詰めてやっと凌いでいる学生もいます。

・自給率の低下は以前から問題視されていましたが、事態はこのところ更に深刻化していて、2020年には自給率は約37%に下がっています。ヨーロッパでも一時期自給率がかなり下がったが、改善の取り組みが成果を上げ、現在状況は大きく改善しています。それに対して日本の食糧供給は深刻な状態になっています。政府は輸入を増やすことで、またAI技術で生産性を高めることで、食糧供給を安定化させる方針を掲げていますが、到底問題の根本的な解決になるとは思われません。

・これまで政府は第一次産業を守り育てる確かな農業政策を持たないまま、大豆などアメリカが買わせたがっている農業製品を輸入して来て、日本の農業を駄目にしたという専門家の厳しい指摘もあります。自給率を高めるために、日本の農業を根本から立て直さなければなりません。この問題に関して、私たちはもっと確かな知識を得る必要があります。

・日本の農業の危機はただ数字の上で食糧自給率が低下していることだけにある訳ではありません。農産物市場の自由化の結果、最近ではアメリカなどの遺伝子組み換え技術の応用による工業的農産物が市場に出回って、食の安全そのものが脅かされています。農民連合の長谷川会長は、農業の工業化を批判し、伝統的な家族経営の農耕による生態系を活かす農業の育成、地産地消の地域循環型社会の実現を訴えています。農業についてのこれまで考えを根本的に転換して、本当に農業に従事する人たちを大切にする政治が求められています。

・意見交換を始める前に、アドバイザーとして来て頂いている農業経済学者の安部淳さんから話を伺うことにします。

吉田主宰と安部淳さん

＜安部淳アドバイザーの補足＞

・自給率37%という数字はあくまでもカロリーベースで算出した数字で、金額だけで見れば、国産農産物は80%を占めていると言えます。食糧を穀物に限定すれば、自給率はもっと低くなります。日本は既に明治時代にお米を自給することができず、穀物供給は朝鮮半島など植民地化した海外領土からの輸入に頼る状態でした。国内で食糧を十分に供給できないという事情が日本の大陸進出、侵略戦争の背景になっていて、食糧供給の不十分な状況は決して新しいものではありません。

・戦後、米から小麦へ、米食からパン食への転換を図る政策が取られました。学校給食は以前パンと牛乳がベースになっていました。洋食を普及させるために、米ばかり食べると頭が悪くなるといった米食を貶しめる考え方すら広められました。こうした動きはまたアメリカの食物戦略に沿ったものでもあると指摘することができます。厚労省は輸入される食べ物に含まれる添加物などの化学物質による健康被害の危険を顧みようとしませんでした。

・政府からはAIなど先端技術を使った「賢い農業」を訴える声がしばしば聞かれます。しかしこうした所謂スマート農業への転換には大きな投資が必要で容易ではありません。本当はもっと自然環境に適した農業のあり方を追求する必要があります。地中に生息する沢山の微生物の力を利用すれば、化学肥料を使わずに済ますことができます。伝統的な農業の良さを見直して農耕に活かすことで、農業そのものを再興しながら、環境問題の解決にも大きな貢献が可能になることを指摘したいと思います。

＜意見交換＞

＊（吉田） 議論の枠組みが示されたと思います。本当に私たちに食糧危機の実感があるとは言えませんが、安倍さんの意見や資料を参考に、一緒に食糧事情について考えましょう。

＊たしかに、スーパーで買い物をしていても、棚は食料品で満たされている。野菜や米はまだ目立って高くなってはいない。しかし困っている人の声も聞かれる。

＊私は元々田舎生まれ。この頃田舎へ行って驚かされることがある。数年前まだ田畑だった土地が花畑になっている。日本の農政は間違っている。海外生活で色々な事を経験した。食糧自給率の高いフランスでは雑草を全然取っていない農地を見かける。フランスは農民の自己主張が強い国で、農民はしばしば抗議デモを行う。日本の農民はおとなし過ぎる。政府の農業政策に色々不満があるはずなのに、抗議の声を上げない。農業研修に日本に来た32歳のアジアの男性が幻滅して、日本の農業は崩壊していると言った。イギリスはかつて農業がひどく衰退して、ホウレン草さえ外から輸入する有様だった。日本ももうすぐ同じ様になるかもしれない。どうすれば自給率を高めることができるかという議論をしているが、毎日大量の食物が廃棄されている。これを何とかすれば食糧事情も違ってくる。

＊このところ日本の至る所で放置され荒地となった農地が目につくようになっている。農業に従事しようと考える人間が著しく減少している。農業では生活が出来ないとか。若い人が外に出て行って、後継ぎがいないとか。理由はいろいろあるだろう。自給率が低いという問題以前に、農村生まれの人たち自

身が農業を通じて人生を描くということ自体が難しくなっている現実がある。

＊農業は社会の工業化の犠牲となってきた。農業は軽視、ないがしろ視される風潮があった。大学教育でも工学部がより評価され、農学部はなおざりにされる傾向があった。工業は重要だがもっとバランスの取れた社会にする必要がある。

＊農民の利益を守り農業の維持発展に努めるべき農協が場当たり的な対応に終始し、方向性を示すことが出来なかった。

＊農家はどうしても農協に依存せざるを得ない。同業者の協力や行政の支援なしに農業を成り立たせることはできない。

＊やろうと思えば、必要なものは自分で作ることもできる。よく見れば至る所に、決して広くはないが使われないでいる土地がある。報道番組で、ソビエト崩壊後、都市部の人間が家の周りの余った土地を野菜作りに利用したりしているのを見た。

＊山歩きをしていて気が付いたことだが、野原には結構食べられそうな草が自然に育っている野菜類は抗酸化作用があって、人間の体に必要不可欠なものである。

＊ホウレン草を自家栽培することはそんなに難しくない。家族の必要ぐらいは満たせる。

＊日本はかつて付加価値の高い工業製品を作って輸出して、逆に農産物は海外で買えばよいと考えていた。今日ではそれも昔の話で、今は産業が空洞化して、日本人が仕事を求めて日本を出て行く時代となってしまった。農業は「汚い、きつい、かっこうが悪い」の否定的なイメージで、真っ先に若者から嫌われる。

＊家は代々農家で、1500坪（5000平米）の田んぼがある。思い起こせば、昔、田植えを手でやっていた。体力を消耗する大変な作業だった。今はもちろん農作業のほとんどは機械を使って行う。かつては外国産米を締め出して米の値段を人工的に釣り上げていた。今は農産物の市場の自由化が進んで米価が下がっている。従って農家は採算を取るのが難しくなっていて、普通にやっていては赤字経営を余儀なくされる。トラクターやコンバインといった農耕機械は値段が高い。個人で機械を購入して元を取ることは困難である。国内の農業を維持するためには政府の生産保障が必要不可欠である。

＊かつて日本の食糧自給率は73％程だった。現在日本全体で37～38％程度だが、岐阜県に限って言えば、26％に過ぎない。

＊トラクター、コンバイン等の農業用の機械は農協から借りたり、複数の農家が共同で所有するケースも多いのではないか。

＊専業農家は機械を皆で順番に使ったりすることもできるが、今、勤め人をしながら農業を営む者が多くなっていて、専業の農家は少なくなっている。専業で無い者は時間的な制約があって共同使用では必要を満たすことが出来ない。その場合、農業を続けようとすれば機械を購入せざるを得なくなる。

＊都市近郊では家庭菜園が珍しくない。家庭菜園の大半は借りた土地でやっている。全般に土地所有者と農業従事者が同じでなくなる傾向が見られる。都会の生活を離れて農業に挑戦する若者がいる。しかし忍耐が求められる農作業は大変で多くは長続きしない。

＊トラクター所有者の数は多くない。トラクターや草刈り機の様な農業用機械を買ったりする場合、公的な交付金が貰える。収穫や田植えは大変な労力を要する作業で機械は欠かせない。肉体労働では効率が悪過ぎるが、トラクターを購入すれば採算が取れなくなる。最近、農作物の種や肥料の値段が上がっていて、農家の経営を圧迫している。理想を言えば、もみ殻や米ぬかを発酵させ肥料として使用して、コストを引き下げ、脱炭素自然循環型の農業を実現する道を進んで欲しいが、現実の農業経営は大変で、農家の人たちは将来を見出すことができないでいる。

＊26年前、家を立てた頃、周りは至る所まだ田畑が残っていた。土地を借りて農作物を作ったりもした。この10年位でほとんど宅地化してしまった。農家では世代交代が上手く行っていないようだ。若い世代が農業を引き継がないで、農地は相続のために次々と農地は更地にされている。今のままではそのうち農業は営まれなくなる。

＊農地を所有しているが、農業は自分でやっていない。家は農家だったが、自分は引き継がなかった。その意味で農業衰退の戦犯で、申し訳ない気もする。土

地は他人に貸して農業をやって貰っている。仕事勤めをしながら、片手間に農業をやっている人もいる。多くは農地を手放したいと思っている。漁業も同じ様な状況にあるのではないか。衰退が際立っているが、第一次産業は重要で、状況を打開する必要がある。若い人たちが引き継いでやっていける様な仕組みを作る必要がある。

＊政府は敵基地攻撃能力のための軍拡に前のめりになっているが、日本は戦争をやっている場合じゃない。

＊経済学者の宇沢弘文は農業が私的経営に馴染まず、ただ資本の論理でやろうとすると上手くいかない、と言っている。農業は寧ろ公的な支援で枠組みを整えるべき社会的なインフラの一種である。要するに農業は社会的に必要なエッセンシャルワークで共同体的枠組みの中で営まれるべきである。友人が板取町で必死になって農業をやっている。土地は余っている。収入が保証されれば従事する人も増える。国が何とかする必要がある。

＊皆で賃金を上げるように声を上げなければならない。政府がやるのを期待しているだけでは不十分。他人事みたいな評論家的な発言はたやすい。皆で行動しないと何も変わらない。

＊適切に米価を算定する必要がある。工業重視、農業軽視は克服されなければならない。工業と農業が共存できなければ社会は成り立たない。そのために労農の連携が求められる。穀物及発酵食品と魚の和食に代わって、肉と油を使う洋食を推し進めたために、日本の栄養事情は質的に悪くなっている。アメリカは農産物をもっと日本に買わせたいと思っていて、日本の農業政策に大きな影響を及ぼしている農協を阻害要因と見なしている。

＊食べることは生きるための根本である。私たちは農業が衰えれば国も衰え滅びるということを十分理解していなかった。

＊日本の将来に関して絶望している。希望は無い様に思われる。食糧危機、エネルギー危機、知れば知るほど幻滅を覚える。原子力発電の危険を訴えてきた原子物理学者の小出氏は現在長野の山に籠っていて、仙人になりたいと言っているらしい。日本人は危険が目の前に迫らないと何もしない。

＊学校給食に農薬を使った食材が使われているのを聞いてショックを受けた。どうして問題にならないのか。

＊秋田県では近年新たに農業に従事する人の数が若者を中心に増えているらしい。経営規模も大きくなってきていると聞く。採算の取れる農業も可能ではないか。

＊消費者は安い野菜を買うために、スーパーをはしごしている。他人のことは言えないが、農家の人たちの苦しい立場を理解してあげる必要がある。私たちが少し高くても質の好いものを買う様に心掛けるようにしなければならない。

＊農業は漠然と大変だと思っていた。今日色々な話を聞いて、複雑な問題が絡んでいる事を知った。

＊農村には多くの人が好ましくない先入見を持っている。不自由さとか排他的とか田舎暮らしの低い評価が農業の再生の邪魔をしている。

＜意見交流の最後に＞　安部淳さん　吉田千秋

◎安部淳さん：
色々な意見を聞けました。今日の様に消費者や生産者の声を直接聞く機会はほとんどありません。私が何より訴えたいことは「食べることは命の問題である」ということです。第一次産業はもっと大事にされる必要があります。日本は大事な事をないがしろにして工業優先でやって来ました。私たちは世界がつっていることを知らなければなりません。国家間の思惑が各国の政策決定に影響を与えています。農民連合

会長が訴えている様に、学校給食の質は基本的人権の問題であると言っても決して言い過ぎではありません。

◎吉田千秋
・食品、とりわけ野菜類は新鮮なのが第一で、地産地消を基本とした地域循環型の社会を作っていく必要があります。
・農協は元々大切な理念を掲げ、農業の発展に大きな役割を果たしてきましたが、残念ながら、目先の利益ばかり追い求め、その本来の役割を果たすことができていないようです。
・自然環境を守るという観点からみても、田んぼは一時的に水をためることのできる天然のダムの機能を担っていて、重要な役割を果たしています。
・耕さないで補助金を与える制度は、目先の損得だけ考えて農業を駄目にする間違った仕組みだと思われます。農業は無くても構わないと言っているに等しいものです。
・農村の過疎化は深刻です。都会の若者を呼んで放棄された農地を耕して貰う試みは、うまく行くとしても特殊なケースに過ぎません。もっと根本的な改革が必要なことは明らかです。今日いろいろ出された意見を参考に、今後もいっしょに考えていきましょう。

＜2月例会感想、意見、便りなど＞

〇＜「哲学カフェ」は楽しいです＞

やっぱり「哲学カフェ」は楽しいです。知らないことを知り、皆さんの多様な意見から気づける。久しぶりに参加して良かったです。

今回のテーマ「いかに食糧自給率をあげていくのか･･･このままでは危ない！」については、スーパーには食材があふれている中で、日本が食糧危機だなんて思えませんでした。しかし、皆さんの意見を聞いて理解しました。政治に関心を持たないと、生活は苦しくなると思いました。世の中に関心を持つこと。だから、私は「哲学カフェ」に続けて参加したいと思っています。

（子猫）

〇＜「哲学カフェ」に始めて参加して＞

哲学カフェ例会に参加して、良い経験をすることができました。哲学という名前から少し敷居が高いとの第一印象を持ちましたが、杞憂に終わりました。参加者が自由意見を述べ合うという雰囲気を感じることができたからです。

今の世の中では、この自由にものを言える事が少しずつ難しくなっており、自由に自分の意見を述べることができる環境は大変重要なことだと思います。今後とも自分な空気の継続をお願いします。

今回の食糧自給率に関してのテーマについて、重要であることは論を俟たないことです。しかし、多くの人の関心は低いのが現実です。如何に多くの人に食糧問題に関心を持ってもらうことが、食糧自給率を上げるための間接的に一つの解決策になるものと考えます。

今後とも社会の中の様々な問題点や不条理を炙り出して、議論をできる環境を作って頂きたいと思います。

（アカナベ老人）

〇＜いつも「哲学カフェ通信」有難うございます＞

食糧問題はずっと以前から不安を感じていて家庭菜園をやれたらと思い続けていました。結局、体力と時間の問題を解決できず年とともに断念しているような状態です。いまは生協で購入しない物は近くの農協で地元の野菜を購入することが多いので、国産の物を基本的には取り入れた暮らしをしていると思います。

10年以上前の話ですが一緒に働いていた農家の方が「そこら中、耕していない田んぼや畑まるけで、そのうち皆（農家ではない人達）が耕さなくてはいけなくなるぞ」と、言っていたことを思い出します。

家庭菜園やりたい人はたくさんいると思うけどお水の問題とか道具とか作り方とか心配はいっぱいあります。安定的に都合よくできないので難しいのかな。
誰かGoodな仕組みを考えてくれたらなぁと思います。

（takako rantyu）

〇＜農業、農民を重視する政治を＞

食糧危機問題を農政問題という枠内で捉えるのではなく、日本の戦後の政治の流れを俯瞰的に見ていくことが肝心ではないかと思います。1960年ころからの高度成長期に入って農業、農村が衰退させられ、アメリカの要請で食料を輸入し、「自由貿易＝TPP」に加盟させられました。これらを主導した自民党政治が食糧危機を招いたと思われます。（中略）
農産物は自然環境の影響を強く受けます。昔、政府が行ったように農民から高く作物を購入し、国民には安く供給する、言わば2重価格制度でしっかり農業を経済面で支えなければ農業は衰退するばかりです。農業だけでも食っていける制度を確立しなければ食糧危機に対応できないでしょう。また、少子化問題も農民、労働者

の若者に経済的安定と希望が持てるような政治的施作を作らなければ絶対に解決できないでしょう。（三戸）

〇＜民は食を以て天下と為す＞

民は食を以て天下と為す、と古から言われるように、光合成が出来ない人間にとって、食は一大事です。

安全保障について、武器のことばかりが語られる印象を私は持ちますが、兵站の基本が食糧であることは、クレフェルトの『補給戦』などからも明らかであるのに、”リアリズム”を自称する政治ですら、真剣には語られません（破滅は我の後に来たれり、ということなのでしょうか）。江戸時代の飢饉で犠牲になったのは、従来の貧しい人というイメージに反し、流通に頼っていた富裕な都市民も多かったのです。

現在の物価高の一要因も、円の信用力低下に加え、食料自給率の低さにあります（円安かつ、もはや目ぼしい産品のない今の、今の日本から一体、何を代わりに輸出して帳尻が合わせられるでしょうか。）。

勿論、技術革新による食の確保という路線も模索されてはおりますが、安全・費用の面での課題があり、そもそもコロナ禍は、（人災の側面を考慮しても）、人間が技術で改善は出来ても、克服しきれない自然の複雑さを浮き彫りにした出来事でもありましたのに・・。

（kokei kito）

〇＜ダーチャみたいなことができないか＞

国家の安全保障にとって一番重要な食料自給率がこれほど低いという現実は、日本は主権国家でなく米国の属国であることの証拠であり、農業や農村に関するネガティブなイメージも支配者層の行っている意識的な印象操作のような気がします。というのは、農業を営んでいる方々には本当に失礼ですが、自分の世代だと、農村と聞くとまず因習という単語とか横溝正史の八つ墓村とか、農家に嫁ぐと大変とかを連想してしまうからです。

そして、食料自給率の問題はオワコンの日本が抱えている根本的な問題の一つの表出のように感じます。日本の場合、これに対するなんらかの動きは深刻な食料危機が来るまで無いような気がするので、ロシアのダーチャみたいなことが具体的にできないかなと考えています。（たなか）

〇＜始めて知ったことも・・＞

意見交流で、日本の食糧事情が現状に至っている事情について、戦後の日本の政治層の意図と動きや、アメリカの意図と働きかけの指摘があった。放置しておくと“危機”に陥る問題点や課題も提起された。
スーパーで食品を選んだりお料理番組をテレビでみたり、食糧事情は日々関係がある事なのに無関心であった。「パン食」が時の流れかと思っていたが、こんな工作があったとは詳しく知らなかった。関心のある事として意識に乗せていきたい。（アダム・スミス）

〇＜大変勉強になった例会＞

農水省のデータによれば、1965年の食糧自給率が73%だったものが、今や37%とは驚きである。戦後の70年間、日本の工業重点化政策により、農業人口が減り、農林業の生産性が衰退したことと同時に米国中心の食糧輸入に依存してしまった結果と考える。これは単に食糧だけの問題ではなく、清流を維持する農村の里山環境の維持や、「国防」という観点から考えても深刻な問題だと思う。

天然ガスをロシアに依存しすぎたヨーロッパ諸国は、エネルギー危機に立たされている。今回、安部淳先生の話題提供があり、「直面する食糧危機」と関連した世界と日本の情勢を知ることができた。また鈴木宣弘氏の「食料自給率の危機」と題した「論文」や長谷川敏郎氏の「食料危機とアグロエコロジー」の「論点」を読むことができ、大変勉強になった。（MS）

〇＜人も野菜も家畜も「健康」であるために＞

玉子1個が60円と聞けば、とんでもないと思う人が日本ではほとんどだろうが、スイスではそれも「OK」だと思われているそうだ。勿論、それが安全・安心の商品で「鶏も健康」という前提条件での話とされるが、20円前後に慣れてきた我々には信じ難い。

このギャップ、多くの農産物に対する値段感覚の全般にあてはまるように思われる。日本の消費者は、生産者側も健康に暮らせ、安全・安心の野菜を栽培し出荷できるかどうかは二の次に、「安価な食品」を求め続けてきたのではないか。それは輸入モノなどに対しても同様で、工業偏重の経済が招いた結果であろう。

近年私の菜園の周りでも、農業会社による大規模経営が始まっている。大型トラクター・小型ダンプ・ユンボ・キャタピラー・大型コンバイン等の機械が主役で、まるで何万羽も飼う養鶏場のように、輸入肥料や薬品・種子を投入しての大量生産。観察していると、しばしば食品の安全性に疑問符が付くことがある。
しかも、その方式は米・麦・大豆などの少数の作物でしか通用しない。安全な食品の安定供給には、丁寧な人による作業やチェックが必須だ。とすれば、農業に対する価値意識を改めないと何も変わらない。食糧危機が危惧される今、人も野菜も家畜も「健康」であるための国民的課題を明確にしたいものだ。

（フィリピンウオッチャー）

〇＜食糧安保の大切さに気づく＞

今回のテーマで気付かされたのは、いくらお金を積んでも食糧が買えないリスクが存在することである。日本の食料自給率がカロリーベースで37%程度しかないことは、知識として知っていたものの、輸入物価が高くなるリスクとしてしか捉えておらず、外貨運用するなど為替対策を講じることで乗り切れるものと考えていた。

やはり、有事などに備えるために、食料自給率を高めることは、経済安全保障にも匹敵する重要課題であり、食糧安全保障の問題について、これまで以上に広く一般的に議論されることが必要であると感じた。

（ryosa）

＜この一本＞　中江裕司監督『土喰らう十二ヶ月』2022年11月公開

原案は、水上勉の料理エッセイ「土喰う日々―わが精進十二ヶ月―」。

始まりは信州長野の厳冬、結構な積雪の畑を歩くツトムさん。人里離れた古い家で老犬と自給自足の生活をする物書きの主人公ツトム（沢田研二）。

ツトムは都会から訪ねて来る雑誌編集者のまち子をもてなすためにとれたての野菜を料理する。まち子の豪快な食べっぷりが羨ましい。雪に埋もれたダイコンを引っこ抜き、冷たい水で土を洗い落とすツトムの手は皮膚に土が染み込んでいる。

一汁一菜の提案をしている料理研究家土井善晴の監修で美しくて見応えがある映像を楽しめる。ゆったりと過ぎる山村の十二ヶ月の中で、人との関わり合いと、土の匂いがする食文化を見直すことができた。

折しも迫りくる食料危機をどう対処するかが、第176回「哲学カフェ」のテーマだった。今当たり前に店頭に並んでいる食べ物が無くなる日がやって来る。

生き延びる為にツトムのような生活を思い描くが、私の現実はプランターを使った家庭菜園が出来るかどうかにある。ツトムが地域住民と交わり、食材を分かち合う姿に大切なメッセージが見えた。

沢田研二はこの映画でナレーションもしていて歌手であるジュリー（沢田研二の愛称）の甘くて響きがあるボイスには癒やされる。センセーショナルな筋書きは無いので、心身疲労時にもオススメ。

第77回毎日映画コンクール主演男優賞受賞、第96回キネマ旬報ベストテン主演男優賞受賞。ジュリーは反原発の市民運動にも協力している。実直でぶれないジュリーの応援もして行きたい。　（Seiko）

この一冊　松本清張著「謀略朝鮮戦争」（『日本の黒い霧（下）』（文春文庫）所収

台湾問題も懸念される現在、必読の書として朝鮮戦争の真相に迫る傑作の中の気になる2つの話を紹介します。

1. 1950年9月、優勢だった北朝鮮軍が国連軍の仁川上陸の際、10万の大軍が眼前から煙のように消えた謎の話。

武装を解いた北朝鮮軍兵士たちの耐久力と不屈の意志は資本主義国の軍隊との相違だった。また南朝鮮住民の北朝鮮軍に対する好意即ち、北朝鮮軍兵士の信念である革命への共感であり、同胞を殺しに来たアメリカ軍への憎悪からだった。

2. 1951年4月、マッカーサー極東軍最高司令官はトルーマン大統領によって突然解任。「天皇より偉い」マッカーサーの解任にびっくりしたのは日本国民だけであり、解任の理由を知らされなかったのも日本国民だけだった。

戦争を朝鮮だけに限定したいトルーマン大統領に対してマッカーサーの方針は台湾の蒋介石を督促して中国本土を攻撃するべき（戦争を朝鮮から中国本土に切換える）ことだった。このマッカーサーの抱いていた計画が彼の基地だった日本に与えた影響の大きさとアメリカの反共政策の凄さを物語る話。

清張は1959年から1960年にかけて、戦後の占領期に起きた数々の事件を『日本の黒い霧』シリーズとして発表した。その最後に掲載された文章がこの33ページの小品である。

現在、台湾有事も問題になっている折、我々も70年前の真相に触れる機会になりそうである。

（井口）

哲学カフェ　第29期(2023年前半)例会予定　＊毎月第2木曜日、午後7:00～9:00

ふれあいスペース⇒コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第175回例会 1月12日(木)	「新年の抱負、展望を語る」 ＊2022年はロシアのウクライナ侵攻開始から長期化する戦争の一年。 ＊新年はどのような年にしたいのか、展望ある年にできるか。語り合おう。 終了しました
第176回例会 2月9日(木)	「いかに食糧自給率をあげていくのか‥このままでは危ない！」 ＊日本の食糧自給率は38%で、世界でももっとも低い水準。どうすればよいのか。 ＊米食を増やす、食品ロスを少なくする‥。根本は農政の抜本的改変ではないか。 終了しました
第177回例会 3月9日(木)	「人工知能(ＡＩ)は人間社会にどのような影響をもたらすのか？」 ＊人間の言語や判断能力を組み込んだ人工知能(ＡＩ)は、急速に進歩し、様々な分野で、大きな影響を与えている。 ＊AIは人間の手助けから、人間に取って代わって多くの分野で人間を不用にする‥その功罪を考えてみよう。
第178回例会 4月13日(木)	「子育て支援はどうあるべきなのか？」 ＊政府は「異次元の子育て対策」と銘打っているが、どうやら「空次元」。 ＊必要なのは、一時的な補助金ではなく、恒久的な支援策、制度ではないか。
第179回例会 5月11日(木)	例会テーマ:提案願います

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願いします。
口座記号・口座番号 00810 1 142912
加入者名　哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫
「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!
http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de　ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

わいわいがやがや

アラカルト

★枯野が広がる2月の郊外、寒風の中にほのかに春の到来も感じるこの季節は、野鳥に出会う時期でもある。早咲きの梅の枝に止まるメジロや騒々しいムクドリは、歳時記によくある一服の絵だ。中でも私が親しみを感じるのはモズ。畑を起こしていると、どこからともなく飛んできて、高みから私の作業を見つめ、土の中に目ざとく見つけたミミズなどに急降下する。モズは親しい小型の肉食鳥でもある。

★モズは「百舌鳥」と書き、季節によって鳴き方が違う。この時期はチェッ・チェッと冷たい空気に向かって鋭く鳴く。それが、早春の季節感と重なって、どこか物悲しい。この鳴き声に因んだ童謡があった。

★♪モズが枯れ木で鳴いている　おいらは‥♪で始まる。作詞はサトウハチロウ。

三番にこうある‥‥兄さは満州へ行っただよ　　鉄砲が涙で光っただ　モズよ寒いと鳴くがいい　兄さはもっと寒いだろ。この悲しさの感覚は、永く日本人の共有物だった。

★昨年の2月末に始まり、今に至っても出口が見えないウクライナ戦争と、「モズの歌」はダブってしまう。凍てついた野原で任務に就く兵士、骸になり氷結して土と一体となった若き命、そして無音のガレキの街。21世紀の最大の痛恨事と呼ばずに何と形容できよう。遠い国の事だからと、知らないふりでは済まされない。

★この凍土の地に春をもたらす花はスノードロップだと聞いた。鈴蘭に似た可憐な花だ。ロシアやウクライナの指導者には、平和な暖かい春を呼ぶ気迫を強く求めたい。だが、同時に私たち市民にも、何がしかの平和への努力が、望まれているのではないか。

（大橋健司）